



魂の居場所

NO.08

宮尾 彰

この春から、近くの高校でお手伝いをしています。

と言っても、私自身教員ではないため保健室横の小部屋で生徒と相対し、一人ひとりの話を聴くのが仕事です。

初対面の際は趣味の話からですが、回を重ねるうちに、ぼつりぼつりと語られる彼らの本音に触れます。

複数の口から「二次元」という言葉を聞き、その意味を知りました。アニメやゲームの世界を指すのだそうです。実際に生きている「三次元」とは区別される世界ですが、彼らにとっては、或る確かな「居場所」なのです。

自分がそこに安住するかは別としても、この言葉の持つリアリティは感受できます。現に、大人が作り出した社会がこれだけ魅力(そとみか)を損(こ)っているのであれば、

「ちつともいい世の中にならなかったねえ……」

去る四月十三日、惜しまれつつ逝かれた理論社創業者の小宮山量平さんが、その最期に漏らされた呟(つぶや)きです。

亡父の遺志を継ぐ長女の荒井きぬ枝さんによれば、「一番大切なのは、『きりん』だからね」

と、臨終の床で氏から遺言を託されたそうです。

児童詩誌『きりん』は、戦後間もなく井上靖、竹中郁、坂本遼、足立巻一らにより起されました。全国の学校現場から、クラス担任を通して児童生徒の詩作品が寄せられ、詩人らの手で精選、編集したのです。やがて、同誌が経済的苦境に陥った際に小宮山氏が理論社として発刊を引継ぎ、赤字覚悟でその初心を守り続けましたが、終に一九七一年の二二〇号を最後に、休刊を余儀なくされました。

悲願を籠めた最終号には、氏自身によって『或る沈黙』と題された休刊の辞と、長く選者を務めた詩人坂本遼への追悼文が収められています。

昭和二年、入隊直前に著された遼の処女詩集『たんぼぼ』の言語宇宙は、その単純素朴な力で私たちのしよぼくれた「三次元」を打ちのめします。

いたいけな妹を亡くし、彼女が育てた牛を売って都会に旅立つ前夜、妹の手を偲(しの)びつつ母の肩を揉む青年の心中を吐露した一篇。都会暮しの青年宛に母から届く、ひらがなだけの手紙が季節を追って並べられ、最後に「お母さん」と始まる青年の短い返信がぼつんと置かれた一篇。

青年の心に、母の心に、寸分違(ちが)わず懐(いだ)かれていた言葉が、これらの詩篇には充滿しています。遼の詩でありながら、決してそれだけに留まらない、母と子による詩です。

「日本の子供の心、をそのままあらわす場」(小宮山)たる『きりん』にも、この同じ詩精神が脈打っています。

汗まみれで働く親の姿を詩にする子ども。作品を読んで編集部に送る担任。多くの中からそれを採り上げる詩人。

あの灰谷健次郎も、熱烈な崇拜者であり投稿者でした。やがて、文部省による教員の「勤務評定」を機に共創造の場は喪われ、詩誌『きりん』も姿を消しました。

今こそ、大人も子ども一緒に、国を立て直す時です。

固有の生きづらさを抱えた子どもたちが地域社会で職業体験をする活動「ふれジョブ」(本誌第八十九号)の中心に、「定例会」と呼ばれる寄合いがあります。

子どもたち、家族、ボランティア、社長さん、校長先生。参加者全員が平らな場所に、分隔でなく座ります。

「子どもが空地で遊んでいたのに似てるかも」(西幸代)この、月一回の場に身を置くと、私たちはそれまで経験したことのない不思議な感慨を覚え、身体が震えます。

それは、誰もが一人残らず無条件に受容られ、誰にも見えない道行のうちにお互いを委ね合う悦びです。

場の紡ぎ出す言葉が、円居(まどい)を豊かに充たしています。人間の幸せが、誰かの必要に応える責任とひとつであることに気付き、深い息を吐く、魂の居場所なのです。

小宮山量平の編集室

<http://www.editorsmuseum.com/>

全国ふれジョブ連絡協議会

<http://www.arelab.jp/>

